

市政トピックス

市中心部の新たな救急出動拠点 —仙台市中央救急出張所が開所

仙台駅直近の宮城野橋高架下に「仙台市中央救急出張所」が完成し、4月1日から業務を開始しました。

高齢化の進展に伴い、市内の救急車の出動件数は6年連続で過去最多を更新しており、昨年は5万4千件を超えています。このような状況に対応するため、救急需要が特に高い市中心部に新たな出張所を開所し、救急車の現場到着時間の短縮を目指します。

出張所には、救急対策係を新設



▲宮城野橋高架下の仙台市中央救急出張所。救急車3台、広報車1台が常駐しています



▲救急車の車庫は、消毒室と直結しており、傷病者搬送後の衛生を保ちます

市政トピックス

147年の歴史に幕 —作並小学校、大倉小学校が閉校

作並小学校(本校・新川分校)および大倉小学校の閉校式が行われました。両校は明治6年に開校した歴史ある学校。児童数の減少により、4月から上愛子小学校と統合することになりました。

閉校式は、両校とも参加者を限定するなど、新型コロナウイルス感染予防対策を行った上で開催。3月14日に行われた作並小学校の閉校式では、児童を代表して6年生の今泉蓮君が「閉校式を未来へ進む始まりだと考え、前向きに進んでいきたい」と決意を語りました。また、3月20日の大倉小学校の閉校式では「大倉小学校が大好きです」など、一人一人が感謝の言葉を述べました。

児童たちは、保護者や地域の方に見守られ、思い出を胸に校舎を後にしました。



▲作並小学校閉校式



▲大倉小学校閉校式

市政トピックス

市政トピックス

荒井小学校が開校しました

市内128番目の市立小学校として、児童数が増加した七郷小学校から分離し、荒井小学校が開校しました。全18クラス、473人(4月1日現在)の児童が新しい校舎で学びます。

4月6日の開校式は新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため、出席者を新6年生81人と教職員に限定して開催。児童たちは、マスクを着用の上、少し緊張しつつも晴れやかな様子で式に臨みました。千田博史校長は「このような素敵な学校ができたのは、地域の方々のおかげです。一日一日を大切に

市政トピックス

新しい家族の誕生を メモリアルカードでお祝いします

4月1日から若林区役所では、出生届を提出した方に「若林区オリジナル出生記念メモリアルカード」をお渡ししています。企画・デザインは、若林区の若手職員を中心に組織されたプロジェクトチーム「W.A.K.」が担当。出産を控えた方々を対象にアンケート等を実施し、区民の皆さんのご意見を伺いながら制作しました。



▲先着1,000枚。四隅を鳥の彩り、四季折々の花で飾り、お子様たちが祝福するイメージしています

カードに使用された紙は、再生紙「仙臺七夕折紙」。これは、市内の児童生徒が東日本大震災からの復興を祈って、仙台七夕の際に制作した折り鶴の吹き流しが再生紙として生まれ変わったものです。カードには、赤ちゃんの名前や生年月日、身長・体重、両親からのメッセージを記入する欄や、写真を貼るスペースを設けています。ぜひ、お子さん誕生の記念としてご使用ください。



▲開校式は、新校舎の体育館で行われ校長に校旗が手渡されました

市政トピックス

歴史的な価値が評価

3月19日に開催された文部科学省文化審議会において、仙台市博物館所蔵資料の「伊達家文書」および「伊達家印章」が、国の重要文化財に指定されることになりました。

今回指定されるのは、1046点の伊達家に伝来する文書類と、歴代の仙台藩主13人のうち、5代藩主吉村公を除く12人が使用した印章など171点。鎌倉から室



▲伊達政宗書状(宛所不明。1590年)(上)と伊達政宗所用印章(下)

町時代までの伊達家と朝廷・幕府との関わりを示す文書や、政宗公が近隣諸大名や豊臣秀吉らとやり取りした書状、ローマ教皇へ宛てた書状に押された印章など、いずれも中世の東北地方や仙台藩の歴史・文化を研究する上で第一級の史料群と評価されました。博物館ではこれを記念し、特集展示を行う予定です(25ページ参照)。

また、今月の表紙を飾る宮城野区原町の鳥山米穀店の店舗兼主屋も、同審議会において国の登録有形文化財に登録されることになりました。

鳥山米穀店は明治7年頃に建築。通り土間が無い間取りなどに旧仙台藩領における町家の特徴が残っていることに加え、米の集積地として発展してきた原町の歴史を現代に伝える貴重な建築物であることなどが評価されました。

今回の指定・登録で、市内における国の重要文化財は16件、登録文化財は53件となります。

3.11 震災文庫を 読む

東日本大震災を語り継ぐための市民図書館に設けた「3.11震災文庫」。所蔵する約1万冊から、よりの本を「紹介します」。

児童文学で震災を伝える
児童文学作家 佐々木 ひとみ



「オオカミのお札」美咲が感じた光―現代―
おおぎやなぎちか/作
お川学/絵
くもん出版



「兄ちゃんは戦国武将!」
佐々木ひとみ/作
浮雲宇一/画
くもん出版

「オオカミのお札」は、オオカミを「大神さま」として祀る一族の江戸時代、昭和の戦時下、現代を描いた3部作です。おおぎやなぎさんはオオカミ信仰をベースに、時代ごとに疫病(痘瘡)・戦災・震災といった厄災に見舞われながらも懸命に生きる人々の姿を描いています。

3巻目の主人公は、大神さまや先祖の存在を感じながら、東京で母や祖父とともに暮らす美咲です。岩手に住む父と姉を東日本大震災の津波で失った美咲は、大神さまが困難から救ってくれる存在ではないこと、先祖が懸命に生きてくれたことで今の自分があることに気付きます。厄災との向き合い方を考えさせられる、示唆に富む物語です。

モデルは、2011年の震災以降「ともに、前へ」を合言葉に、仙台・宮城の観光PRを行っている「奥州・仙台おもてなし集団 伊達武将隊」です。

ある日、東京で暮らす春樹のもとに大学中退後、音信不通になっていた兄の夏樹から「杜乃武将隊の伊達政宗として活動している」という手紙が届きます。夏樹への反感を胸に仙台にやってくる春樹は、杜乃武将隊を見守る人や演武を楽しむ人と出会い、「政宗公であること、このまの力になりたい」という夏樹の想いに触れることで、彼らが震災で傷ついた人々を励ます存在であることを知ります。――一生懸命は人を勇気づける。震災後、伊達武将隊の姿から学んだことを物語にしました。

●紹介した本は、市民図書館でご覧いただけます(6月10日まで休館中です。詳しくは24ページを「確認してください」) 問市民図書館 ☎261-1585